

幼児の道徳的規範意識の発達 —他者を傷つける言動に対する認識からの検討—

湯浅 阿貴子 (現代教育研究所研究員)

問題と目的

現在、日本では4歳以上になると90%以上の子どもが社会的集団に加わっている¹。しかし、初めて社会的集団に加わり始める時期であるが故に、他者とのかかわりのなかで道徳的規範にかかわる問題が生じることが少なくない。

たとえば、リレーをして遊ぶようとしている幼児の集団の中で、「○○くんは足が遅いから同じチームにならないで」と言ったり、ごっこ遊びを展開する中で「○○ちゃんは髪型がかわいくないからプリンセスになったらダメ」など、相手の能力や特性、容姿を否定の理由にし、自らの欲求を通そうとする実態が見られることがある。そして、このような現象は筆者の観察だけではなく、多くの保育者が実践の中で目にし、指導の難しい問題として認識している(湯浅, 2013)。

しかし、このような道徳的規範にかかわる問題が生じた際の教師のかかわりについて明らかにした研究は少ない。首藤ら(2002)が行った研究では幼児が「他者を心理身体的に傷つけてはいけない」といった規範から逸脱する場合、保育者は重大な問題として捉える傾向にあることが明らかにされているが、その指導の実態についてはこれまで十分に論じられていない現状にある。

指導は子どもの実態や認識に応じてなされるものだとすれば、まず、道徳的規範の逸脱行動に対する幼児の認識を明らかにする必要があるだろう。

道徳的規範の逸脱に対する幼児の認識についての先行研究では身体的攻撃(越中, 2005; 越中ら, 2007)や関係性攻撃(越中, 2005; 畠山ら, 2012)を中心とした攻撃行動が研究課題に扱われている。しかし前述したような心理的攻撃に対する認識については研究対象として殆ど扱われていない。

これまでの知見から、「攻撃的な行動はいけない」という認識が幼児期には既にあること、4歳以上になると規範を理解した上で報復的攻撃に理解を示す幼児も見られることが明らかにされている。つまり、幼児期でも年齢が上がるに従い、道徳的規範の逸脱行為に対してもその行為に至る状況や文脈を考慮するようになることが示されている。このような文脈性(状況依存性)による判断に焦点化した研究は、森川・鈴木(2006)、森川(2007)があり、日本人は欧米人よりも対人関係を優先した判断をすることなどから「状況依存性(文脈性)」(理由があれば逸脱しても仕方ない)の観点から心理的攻撃と身体的攻撃に対する善悪の判断の発達を検証している。その結果、道徳的規範の逸脱に対して、6～7歳は理由があってもいけないと答える割合が高いのに対し、10歳から11歳ごろに、他者の福祉や自己防衛を理由にした場合、逸脱への許容が高まることを示した。

森川・鈴木(2006)、森川(2007)の研究では、最も低い対象年齢が6歳であり、6歳児は理由があっても道徳的規範の逸脱は許されないと考えることから、更に低年齢の3歳から5歳児は状況による規範の逸脱は許容しない可能性が高い。しかし、越中(2005)、越中ら(2007)の調査では、4歳児でも状況による道徳的規範の逸脱行為を許容する結果が示されていることから、幼児も状況依存的な判断をすることが考えられる。この理由を考察すると、森川・鈴木(2006)、森川(2007)は集合

調査法（質問が一斉の場で提示され、それに対し被験者が記入用紙に回答を記入する）による調査であるのに対し、越中（2005）、越中ら（2007）は個別の面接方式での調査であること、更に、攻撃の内容が具体的なことや、攻撃に至る経緯が紙芝居を用いて詳細に提示されていることなども要因として考えられる。つまり、調査方法や話の提示の仕方等によって理解の深まり方が異なり、幼児期にも状況依存的な判断をする可能性もあるのではないだろうか。

以上から、本研究は、「他者を（心理的に）傷つける言動をしない」といった道徳的規範の逸脱行動に焦点化し、例題に対する善悪の状況依存性判断と、判断理由を学年別に明らかにすることを目的とする。それにより、「他者を（心理的に）傷つける言動」に対する子どもの認識の発達上の特徴を知る事ができ、保育の中で「他者を（心理的に）傷つける言動」が生じた際の、保育者のかかわりについて考えるために有用な手掛かりが得られると考えた。

方法

調査対象

調査対象は千葉県私立A幼稚園に通う幼児を対象とした。その詳細はTable1の通りである。2X年と2Y年には、筆者はフリーの教諭として調査園に勤務していたため、幼児には教諭として認知された存在であったが、そのことが回答に影響しないよう調査環境や調査の説明等に特に配慮をした。2Z年は、筆者の勤務先が変更し、また3歳児クラスの幼児への調査実施ができなかったが、3歳児クラスの2X年、2Y年の回答合計数が他の学年の3年度分の回答数と照合し、半数以下とならなかったため、そのことに配慮しつつ分析対象として扱うことのできる回答数が得られたと判断した。

Table1 調査対象の概要

	3歳児クラス	4歳児クラス	5歳児クラス
2X年度	23名 男児14名；女児9名	25名 男児15名；女児10名	18名 男児14名；女児4名
2Y年度	18名 男児11名；女児7名	27名 男児14名；女児13名	29名 男児19名；女児10名
2Z年度	実施なし	17名 男児10名；女児7名	26名 男児12名；女児14名
合計	41名	69名	73名

なお、研究の目的や実施内容、データの使用と公開については、保護者及び幼稚園に説明し、了承を得ている。

調査日時

2X年度：2月28日～3月13日

2Y年度：2月22日～3月8日

2Z年度：2月28日～3月14日

調査内容

例題の設定には、筆者の観察の中で複数回生じた道徳的規範にかかわる問題であり、幼児同士のいざこざへ発展したことがある内容を選定し、例題化した。

以下に示す例題内容と、例題をイメージしやすくするための補助的な絵を幼児に提示しながら質問した（Figure1 参照）。例題に示される行動に対しての是非とその判断理由について質問していき、回答方法は、森川（2008）が示す「状況依存性」判断を参考に、「仕方ない時もある」か「絶対にしてはならないか」を尋ねた。回答に戸惑う場合には、「わからない」や「答えない」という回答でも良いことを伝えながら調査を行った。また、質問に対し、「仕方ない時もある」、「絶対にしてはならない」との返答があった場合には、そのように判断した理由について質問した。また、性別設定が回答に影響を与えないよう、回答者と同性（男児→Aくん、女児→Aちゃん）の設定とした。

例題内容

《個々の能力に関する例題》

赤と白に分かれてリレーをしていました。自分のチームは勝っていたが、自分と同じチームで走るのが遅れるAくん（ちゃん）の番で抜かされ、大差が開き、結果負けてしまった。同じグループの人が「Aは遅い」「Aのせいで負けちゃった」と言った。

Q1：Aくん（ちゃん）に「遅い」と言うことについてどう思いますか

A1：「遅い」と言われても仕方ないときがある

A2：Aくん（ちゃん）が抜かされて負けたが、「遅い」と言っては絶対にいけない

《個々の容姿に関する例題（言葉）》

※片腕のない子がいました。その子のことを「変なの」と言って笑っている人がいました。

Q2：「変なの」ということについてどう思いますか？

A1：「変」と言われても仕方がないときがある

A2：どんな理由でも絶対に「変」と言ってはいけない

《個々の容姿に関する例題（態度）》

※片腕のない子がいました。その子のことを「変なの」と言って笑っている人がいました。

Q3：笑うことについてどう思いますか？

A1：笑いたくなったら仕方ない時もある

A2：どんな理由でも絶対に笑ってはいけない

また、Q2、Q3で取り扱う身体的特徴に関する例題については、実際に見られた事例をもとに作成したものであるが、人権上の配慮点として次の処置を行った。

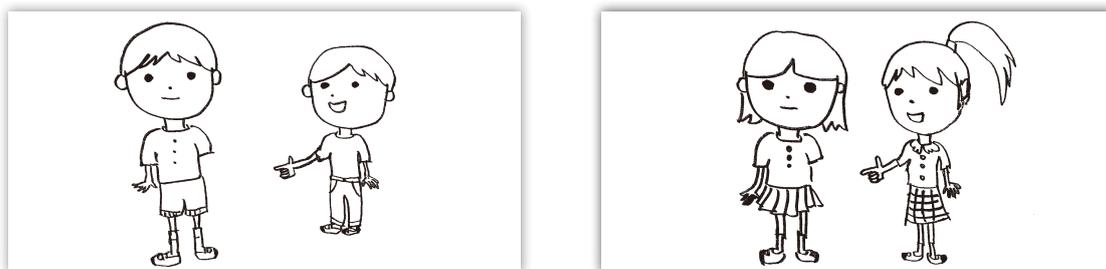


Figure 1 《個々の容姿に関する例題》で使用した補助図（左：男児用、右：女児用）

《人権上の配慮点》

- ①実際に起こった事例から趣旨を損わない範囲で筆者が内容を変更し、例題を作成した。従って、本例題の絵や内容は、実際の場面として生じた内容ではない。
- ②身体的特徴について「手」という例題設定としたのは、絵の中央部分に位置する為、「違い」について幼児が見て気付きやすいと考えたことによるものである。従って、身体部分についても実際の事例と関係は無い。
- ③幼児に説明する際には、「例えば」「もし」「～だったら」といった仮定を意味する言葉を用いて仮の場面であることを強調し、実際に生じたものではないことも説明した。

調査方法

半構造化インタビューを行った。周囲の影響をできるだけ受けず、且つ幼児に緊張感を与えずに思ったことを表現することができるよう、幼児が日常的に使用しているホールの一角で行った。

分析方法

例題として提示した問題に対する行動の善悪の判断（状況依存性判断）とその判断理由を照合して考察するため、コレスポネンス分析を行った。

分析の手順

- (1)「例題に対する状況依存性判断」について回答結果をクロス集計表に示した（Table2, Table3, Table4）。
- (2)「状況依存性判断とその理由」を照合して考察するため、コレスポネンス分析を行った（Figure2～Figure10）。

手順は、幼児が語った（1）の回答理由を文章化し、テキストマイニングによる形態素解析（文章を単語あるいはフレーズごとに切り分ける処理）を行った。テキストマイニング分析には、SPSS Text Analytics for Surveys4.0を使用した。抽出された単語は出現頻度によらず、基本的に全ての単語をキーワードとして扱った。但し、共起する単語を確認した上で、「思う」「する」など、そのキーワードを省いた場合も十分に意味が捉えられると判断した場合にはその後の分析に使用するキーワードから除外した。（例えば「相手が悲しむと思う」という一文では、「相手」「悲しむ」「思う」というキーワードが抽出される。その場合、「思う」がなくても内容の推測が可能であると判断できるため、採用キーワードから除く事などである。）

最後に（1）の結果と、その理由を示すキーワードをコレスポネンス分析によって対応図に示した。コレスポネンス分析にはIBM SPSS Categories Ver. 22, IBM SPSS Statistics Ver. 23を使用した。

結果と考察

《個々の能力に関する例題》リレーでA児が走るのが遅れ、チーム全体が負ける事に繋がった場面で、A児に「遅い」という幼児がいた場合の質問

Q1：Aくん（ちゃん）に「遅い」と言うことに対する善悪の状況依存性判断の結果をTable2に示す。

表の中の「OK」は、A1:「遅い」と言われても仕方ないときがある、に賛成した子どもである。「NG」はA2: Aが抜かされて負けたが、「遅い」と言っては絶対にいけない、に賛成した子どもである。

また、善悪の状況依存性判断の理由について述べた幼児は「理由あり」、何も答えなかった幼児は「理由なし」に分類した。

Table2 Q1.個々の能力に関する例題に対する善悪の状況依存性判断の結果
() = %

判断		クラス	3歳児 (n = 41)	4歳児 (n = 69)	5歳児 (n = 73)
OK	理由あり		0	4 (5.8)	3 (4.1)
	理由なし		4 (9.8)	8 (11.6)	8 (11)
NG	理由あり		7 (17.1)	36 (52.2)	50 (68.5)
	理由なし		19 (46.3)	17 (24.6)	9 (12.3)
無回答・わからない			11 (26.8)	4 (5.8)	3 (4.1)

Table2に示す結果を見ると、3歳児クラスにおいても、6割を超える割合の幼児が「状況にかかわらずいけない」と回答している。しかし、「絶対にいけない」と回答した幼児も理由は述べない方が多かった。

4歳児クラスでは、全体で7割を超える割合の幼児が「絶対にいけない」と判断する結果となった。「仕方ない時もある」と答えた幼児は理由を答えない方が多かったが、理由を答える幼児も数名みられた。5歳児クラスでは、8割を超える割合の幼児が「絶対にいけない」と判断を示した。そして、7割近い幼児がその理由について回答している。「仕方がない」と答える幼児は3歳児クラスの幼児よりも4歳児クラス、5歳クラスの方が増加した。しかしその理由は述べない幼児が多かった。

《3歳児クラス》

3歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「ダメ(4)」「言葉(3)」「頑張っている(2)」といったキーワードが挙げられた(以降、キーワード内の括弧には、出現頻度を記す)。全体のキーワード数は7個である。善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由を示すキーワードに対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure2である。

コレスポネンス分析の結果図は、縦軸と横軸の値が0に近づくほど出現頻度が高いことを示している(以降、縦軸と横軸の0が交差する点を中心と示す)。また、近くに布置したキーワード同士は関連性の強いキーワードとして見ることができる。

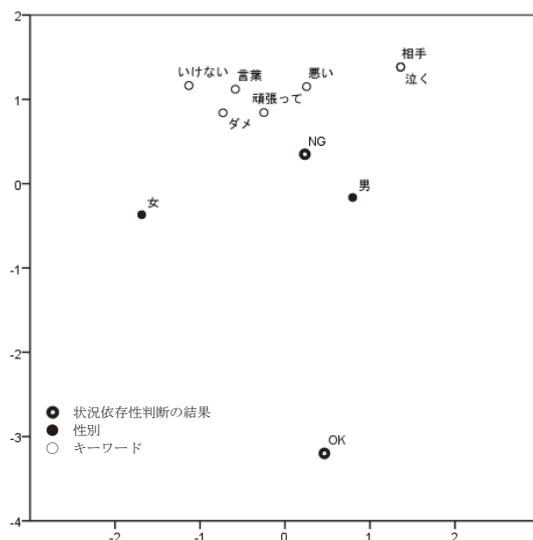


Figure2 「個々の能力に関する例題」の相関分析の結果（3歳児クラス）

Figure2 に示す結果をみると、中央に「絶対にいけない」を示す「NG」が布置し、その左上から「いけない」「言葉」「頑張ってる」「ダメ」「悪い」といったキーワードが集合している。

また、右上に「泣く」「相手」というキーワードが布置した。

《4歳児クラス》

4歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、全体のキーワード数は19個となり、抽出されたキーワード数が3歳児クラスと比較して倍以上に増えた。キーワードは「遅い（11）」、「かわいそう（10）」、「悪い（6）」、「ダメ（5）」、「相手（4）」、「意地悪（4）」といった言葉が上位に挙げられた。善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由を示すキーワードに対し、相関分析を行った結果がFigure3である。

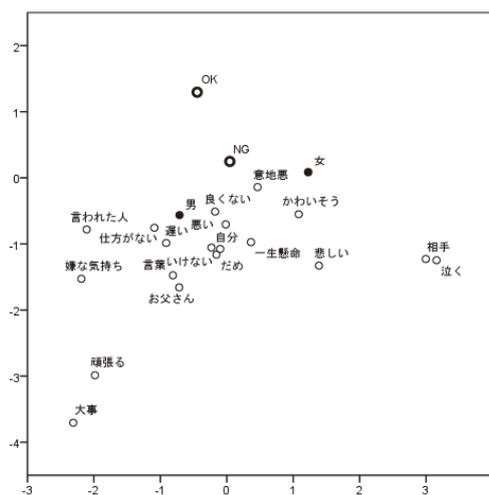


Figure3 「個々の能力に関する例題」の相関分析の結果（4歳児クラス）

Figure3 に示す結果をみると、中心部に「絶対にいけない」を示す「NG」が布置し、その周辺

に「意地悪」「良くない」「悪い」「かわいそう」といったキーワードが布置した。また、「お父さん」というキーワードはその右上の「だめ」とかかわり、「お父さんがだめって言うと思う」という回答であった。

「仕方ない時もある」と答えた、幼児は「遅いから」、「仕方ない」、とその事実を理由に挙げる回答が見られた。

《5歳児クラス》

5歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、全体のキーワード数は24個であり、「かわいそう (17)」、「言う (14)」、「遅い (9)」、「相手 (8)」、「悲しい (6)」が上位となった。善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポンデンス分析を行った結果がFigure4である。

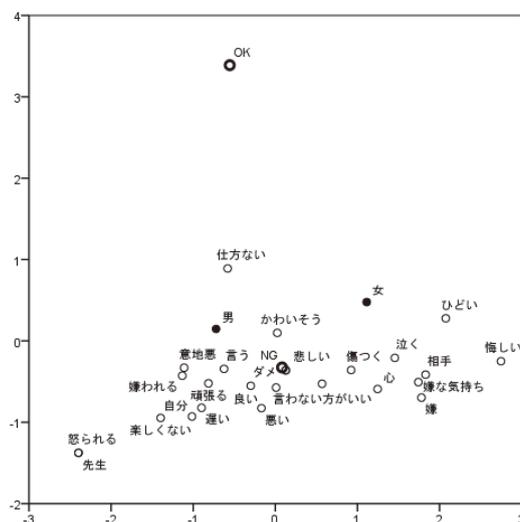


Figure4 「個々の能力に関する例題」のコレスポンデンス分析の結果（5歳児クラス）

Figure4 に示す結果を見ると、中心部に「絶対にいけない」を示す「NG」が布置し、その周辺に「ダメ」「悲しい」「言わない方がいい」「かわいそう」といったキーワードが布置した。またNGの付近に「良い」というキーワードも挙がったが、「心の中で言えば良い」や、「頑張れば良い」といった内容を表すものであった。

左下に布置したキーワードを見ると、「先生に怒られる」といった内容が挙がった。右側には「泣く」「傷つく」「心」「相手」「ひどい」「悔しい」「嫌な気持ち」といった相手の行動を予測するものや、相手に生じる感情が示され、女児の方が近くに布置した。

「仕方ない時もある」を示す「OK」の理由には、「かわいそう」だけれど「仕方ない」といった内容が語られた。

《個々の容姿に関する例題（言葉）》「片手がない」という容姿が自分とは異なる相手に対して「変だ」という幼児がいた場合の質問

Q2: 「変なの」ということに対する善悪の状況依存性判断の結果を Table3 に示す。

Table 3 Q2. 個々の容姿に関する例題(言葉)に対する善悪の状況依存性判断の結果 () = %

判断		クラス	3 歳児 (n = 41)	4 歳児 (n = 69)	5 歳児 (n = 73)
OK	理由あり		0	1 (1.4)	1 (1.4)
	理由なし		10 (24.4)	4 (5.8)	1 (1.4)
NG	理由あり		7 (17.1)	25 (36.2)	55 (75.3)
	理由なし		18 (43.9)	33 (47.8)	14 (19.2)
無回答・わからない			6 (14.6)	6 (8.7)	2 (2.7)

Table3 に示す結果をみると、3 歳児クラスでは「絶対にいけない」という回答が最も多く、6 割を超えた。

また、「仕方ない時もある」と答えた幼児は 2 割を超えたが、全員理由は述べなかった。

4 歳児クラスでは、「絶対にいけない」と判断する幼児が全体の 8 割を超えた。しかし、「絶対にいけない」と判断した理由についてみると、理由を答えない幼児の方が多かった。「仕方ない時もある」と答えた幼児は 5 人おり、そのうちの 1 人のみ理由を述べた。

5 歳児クラスでは、4 歳児クラスと比較し、「無回答・わからない」「仕方がない場合もある」と答えた幼児が減少した。また、「絶対にいけない」と答えたうち、その理由を述べる幼児が増加する結果となった。「仕方ない時もある」と答えた幼児は 2 人であり、そのうちの 1 人のみ理由を述べた。

《3 歳児クラス》

3 歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「ダメ (4)」、「相手 (3)」、「変 (2)」、「言う (2)」、「泣く (2)」といったキーワードが複数上がった。また、「解釈不明」としたのは「血が出るかもしれないから」といったものであった。全体のキーワード数は 11 個である。

善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果が Figure5 である。

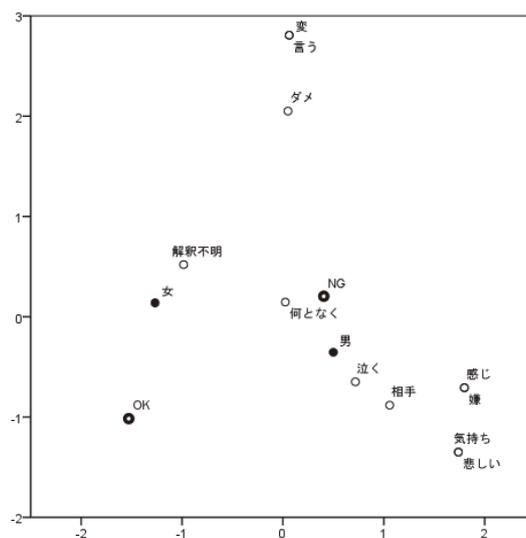


Figure5 「個々の容姿に関する例題 (言葉)」のコレスポネンス分析の結果 (3 歳児クラス)

コレスポネンス分析の結果では、回答数が少ないことから中心部にキーワードが集結せず、広い範囲に分布した。右下では「悲しい」「気持ち」「嫌」「感じ」といったように「変」と言われることで生じる否定的な感情を推測していることが表れるキーワードが集合した。上部では、「変」「言う」「ダメ」といったように、言葉とそれを言うこと自体がダメ、という回答となった。「仕方がない場合もある」と答えた幼児は10名いたが、理由を答えた幼児はいなかった。

《4 歳児クラス》

4 歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「相手 (7)」、「泣く (5)」、「言葉 (4)」、「悪い (4)」、「ダメ (4)」、「切れている (3)」、「悲しむ (3)」、「迷惑 (3)」、「言う (3)」、「意地悪 (3)」といったキーワードが上位に上がった。全体のキーワード数は18個であった。善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure6である。

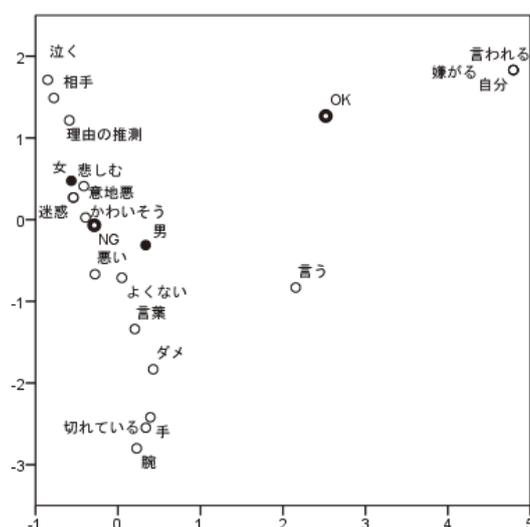


Figure6 「個々の容姿に関する例題 (言葉)」のコレスポネンス分析の結果 (4 歳児クラス)

Figure6 に示す結果を見ると、中心部にキーワードが集結し、上のほうでは「相手が泣く」といった推測や、「変なの」と言うこと自体が「意地悪だから」といったように、言動そのものを理由に挙げる傾向が見られた。下では「切れているから」といった相手の見た目の事実を理由に挙げるキーワードが見られた。また、「仕方ない時もある」と答えた幼児は右上に示す、「相手が嫌がることを言ったら自分も言われるから」といったことであった。

《5 歳児クラス》

5 歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「かわいそう (21)」、「相手 (12)」、「手がない (8)」、「言う (6)」、「悲しい (6)」、「ダメ (6)」といったキーワードが複数挙がった。全体のキーワード数は31個であった。

善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure7である。

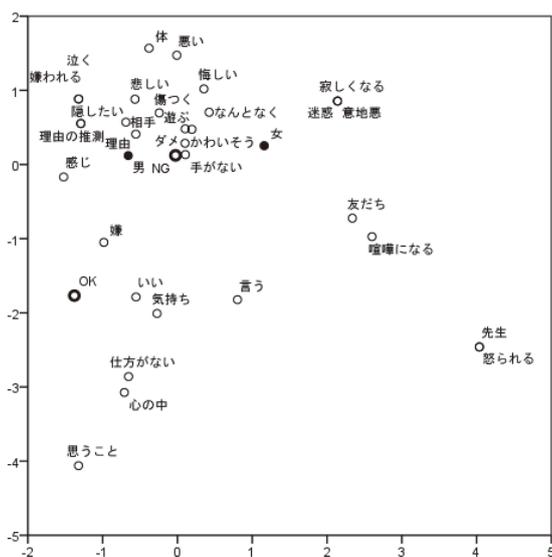


Figure7 「個々の容姿に関する例題（言葉）」のコレスポンデンス分析の結果（5歳児クラス）

Figure7に示す結果を見ると、中心部の「どんな場合もいけない」を示す「NG」の周辺にキーワードの上位が集結した。特徴的な点を挙げると、右下部に「先生」「怒られる」といった保育者の行動を予測する内容や、その左上に「友だち」「喧嘩になる」といった交友関係の悪化を危惧する回答がみられた。また、「仕方ない場合もある」を示す「OK」の下には「思うこと」「仕方ない」「心の中」、とあり、右に「言う」「いい」といった、思うことの仕方無さや、言葉にしてよい言葉といけない言葉の判断を示すキーワードが挙がった。

《個々の容姿に関する例題（態度について）》「片手がない」という容姿が自分とは異なる相手に対して「変だ」と言って笑った幼児がいた場合の質問

Q3：「笑う」ことに対する善悪の状況依存性判断の結果を Table4 に示す。

Table4 Q3 個々の容姿に関する例題（態度）に対する善悪の状況依存性判断の結果
() = %

判断		クラス	3歳児 (n = 41)	4歳児 (n = 69)	5歳児 (n = 73)
OK	理由あり		0	3 (4.3)	6 (8.2)
	理由なし		14 (34.1)	10 (14.5)	3 (4.1)
NG	理由あり		5 (12.2)	21 (30.4)	49 (67.1)
	理由なし		15 (36.6)	32 (46.4)	13 (17.8)
無回答・わからない			7 (17.1)	3 (4.3)	2 (2.7)

Table4 示す結果を見ると、3歳児クラスでは「笑う」ことはいけない、という判断を示す幼児が全体の約半数となった。しかしその理由は答えない幼児の方が多かった。「笑うのは仕方がない」と答える幼児が3割を超え、Q1、Q2と比較して増加したが、その理由は全員答えなかった。

4歳児クラスでは、7割を超える幼児が「絶対にいけない」と答えている。回答した理由を見ると、無回答の割合の方が高かったが、約3割の幼児は何らかの理由を答えた。「仕方ない時もある」と答えた幼児は約2割となり、理由を回答した幼児も数名みられた。

5歳児クラスでは、8割以上の幼児が「笑う」ことは「絶対にいけない」と判断する結果となった。また、「仕方ない」と考える幼児は9人おり、そのうちの6人が理由を述べた点で特徴が見られた。

《3歳児クラス》

3歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、理由を述べた幼児が少なく、キーワードが僅かであった。その内容も「ダメ(2)」であり、全体のキーワード数は4個であった。「理由の推測には」「切られたかもしれない」といった内容であった。

善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure8である。

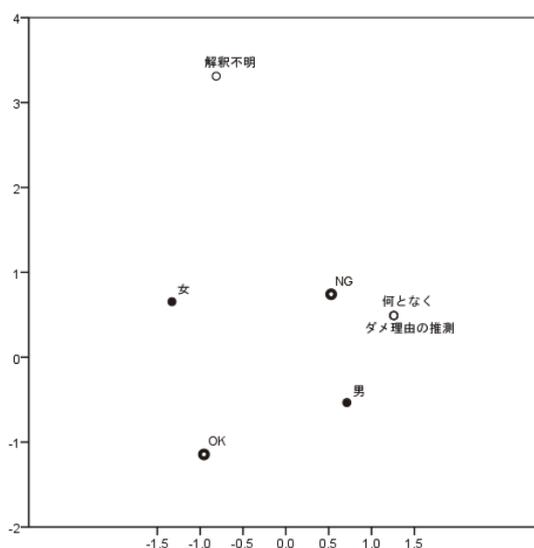


Figure8 「個々の容姿に関する例題(態度)」のコレスポネンス分析の結果(3歳児クラス)

Figure8に示す「個々の容姿に関する例題(態度)」のコレスポネンス分析の結果(3歳児クラス)をみると、中心部から見ると、キーワードは「してはいけない」の近くに集まっている。

「仕方ない場合もある(OK)」と「絶対にいけない(NG)」の差がQ1、Q2と比べ少なく、また理由も答えられない幼児が多かった。「笑う」という行為はそれ自体は否定的な意味を持っていない。しかし、状況により社会的に望ましくない言動となる。3歳児クラスでは、このことへの気づきがあることが窺える幼児も存在するが、自覚的な気づきのない幼児も少なくないことが示される。

《4歳児クラス》

4歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「相手(6)」「ダメ(5)」「泣く(4)」「かわいそう(3)」「悪い(3)」のキーワードが複数挙がった。全体のキーワード数は18個であった。また、「○○が言っていた(1)」は、テレビで同じような内容が放映されていた、との回答であった。

善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure9である。

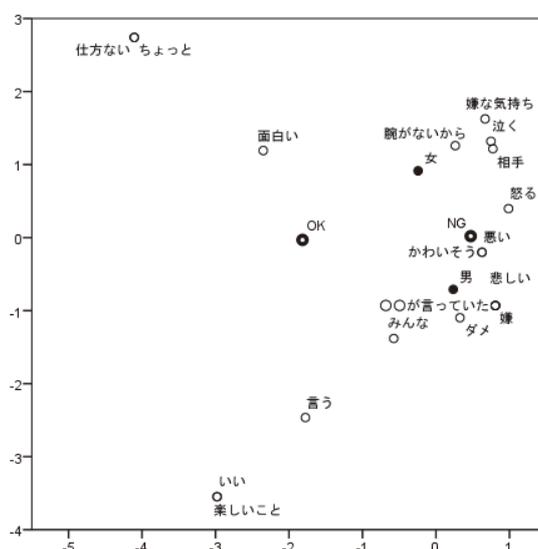


Figure9 「個々の容姿に関する例題（態度）」のコレスポネンス分析の結果（4歳児クラス）

Figure9に示す結果をみると、「絶対にいけない」を示す「NG」の下にキーワードが集結し、「悪い」「ダメ」といった行動そのものを禁止するキーワードや、「怒る」「泣く」「嫌な気持ち」といった相手の感情や行動を推測するキーワード、「かわいいそう」など同情を示すキーワードが布置した。

4歳児クラスでは7割を超える幼児が「絶対にいけない」と答えたが、その理由について回答したのは約半数だった。このことから、理由について詳しく述べることはまだ難しい幼児も多いが、「不快に感じることである」という認識が進む年齢であることが示される。また、少数ながら、「相手が怒る」、「相手が嫌だと思う」という相手側の反応や心情に視点を当てた回答が見られた。「仕方ない時もある」と答えた幼児は、その理由に「面白い」場合、「ちょっとなら」「仕方ない」、「楽しいこと」をしていたら「いい」などの理由を挙げていた。

《5歳児クラス》

5歳児クラスの子どもの回答についてテキストマイニング分析を行った。その結果、「相手（15）」「かわいい（14）」「ダメ（12）」「笑う（10）」「思う（7）」「悲しい（5）」等が上位に挙げられた。全体のキーワード数は29個であった。

善悪の状況依存性判断の結果と、判断の理由に対し、コレスポネンス分析を行った結果がFigure10である。

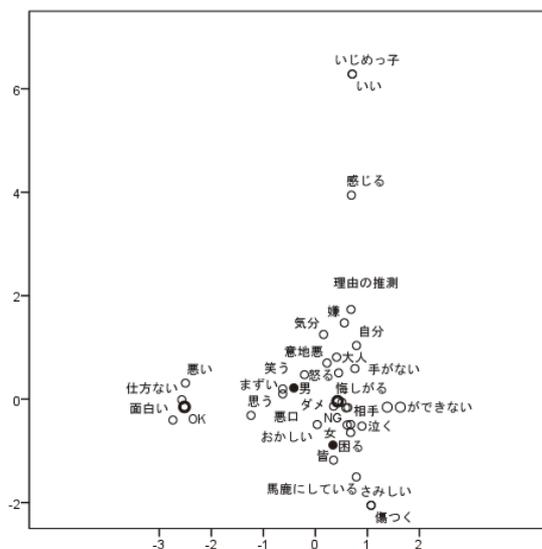


Figure10 「個々の容姿に関する例題（態度）」のコレスポンデンス分析の結果（5歳児クラス）

Figure10に示す結果をみると5歳児クラスでは、無回答の割合が減少し、「笑う」ことは「絶対にいけない」と判断する幼児が8割を超える結果となった。また、「仕方がない」と回答した幼児も、「絶対にいけない」と回答した幼児も、何らかの理由を述べる割合が増加した。「仕方がない場合もある」を示す「OK」の付近に「悪い」「仕方がない」が布置しており、「悪いけれど」ということを前提にしながら仕方がないと回答したものであった。また、「面白い」と「仕方がない」も関連する回答となった。

また、5歳児クラスのみ「馬鹿にしている」といったキーワードも複数挙がった。このことから、笑いが常に肯定的な意味をもつのではなく、嘲笑の意味をもつ場合もあることを理解していることが確認できた。

考察

本研究では、「他者を（心理的に）傷つける言動をしない」といった道徳的規範に対し、幼児がどのような認識をもっているのか、善悪の状況依存性判断とその理由から明らかにし、学年ごとの発達的特徴を明らかにすることを目的としていた。以下に例題ごとの考察と今後の課題を示すことにする。

Q1. 個々の能力に関する例題について

Q1. では、リレーの中でA児が走るのが遅れ、チーム全体が負ける事に繋がった場面で、A児に「遅い」ということに対する善悪の状況依存性判断について質問した。その結果、3歳児クラスでも約半数の子どもが「絶対にいけない」と回答し、その割合は年齢と共に増加した。その理由について問うと、3歳児クラスでは返答が難しい場合が多かったが、4歳児クラスになると理由を述べる幼児が増加した。そしてその理由は、「かわいそうだから」といった相手に同情を示す回答や、「言葉がダメ」といった、言葉そのものが問題であると捉える回答が中心となった。5歳児クラスでは、相手が泣くといったその後には生じる事態や「相手が悲しむ」といった感情の予測、相手との関係性（嫌われるなど）に視点をあてた回答がみられた。このことから、年齢が上がるに従って、

相手の能力に否定的な言葉を投げかけることは、相手の感情を傷つけ、関係性を悪化させることにも繋がるということを理解している幼児も増加するという変化の特徴が確認できた。

一方、「仕方がない時もある」と答えた幼児の割合は、3歳児クラスが10%以下であるのに対し、4歳児クラス、5歳児クラスは15%以上となった。リレーのように特定のルールが前提にある遊びは、そのルールに対する認識の変化に伴って勝敗への意識も変化していく。4歳児以上になると、ゲームにおける勝敗の意味が4歳以下の幼児と大きく異なり、勝つための戦略を考慮するようになると言われる（加用ら、1981）。このことは、ルールによって勝敗がつくことの面白さを感じるができるようになるのと同時に、勝てなかった場合の悔しさが共感的に理解できるようになるため、4歳児クラスと5歳児クラスの子どもは3歳児クラスの子どもと比較し、「仕方がない場合もある」と答えた幼児が増加したことが考えられる。

Q2. 個々の容姿に関する例題（言葉）について

Q2では、容姿に自分とは異なる特徴を有する相手に「変だ」と言うことに対する善悪の状況依存性判断について質問した。その結果、3歳児クラスでは、「仕方がない場合もある」という幼児が3割弱、「絶対にいけない」という幼児が約6割となった。4歳児クラスでは「仕方がない場合もある」と回答する幼児の割合が3歳児と比較して減少したが、その理由については無回答が多かった。理由について回答した場合も、「変だ」と言うことそのものが問題であるという回答が中心となった。5歳児クラスでは、殆どの幼児が「絶対にいけない」という答えを示し、相手の感情を傷つけることや、相手と自分との関係が悪化することを理由に挙げた幼児が多かった。

また、「仕方がない時もある」と答えた幼児は3歳児クラスの幼児が20%台であったのに対し、4歳児クラスは10%以下、5歳児クラスは3%以下となっている。容姿に自分とは異なる特徴を有する相手に対して「変だ」ということは年齢が上がるにつれて許容されなくなることが示された。

以上から、相手の身体的特徴について否定的な指摘をすることは「望ましい行為ではない」という認識が、3歳児クラスには既に生じていることが示された。

3歳児クラスの幼児は、「言葉によって感情が傷つく場合がある」ということを理解し始めている幼児も6割程度存在し、こうした規範への理解が促される時期であると考えられる。

Q3. 個々の容姿に関する例題（態度）について

Q3ではQ2と同様の状況で相手の容姿を「笑う」という行為に対する善悪の状況依存性判断について質問した。その結果、3歳児クラスにおいても約半数の幼児が「絶対にいけない」と回答した。4歳児クラスの幼児は7割以上が「絶対にいけない」と回答したが、その理由を答える幼児は少なかった。5歳児クラスでは、8割以上が「絶対にいけない」と判断した。そして、「かわいそう」といった相手の立場を考慮する回答や、「傷つく」という共感的要素の窺える回答が確認された。また、「馬鹿にしているみたい」といった回答も見られ、笑いは時として嘲笑の意味をもつことを理解していることが窺える幼児の回答も存在した。このような、「笑う」といった、それ自体否定的な意味を持たない行為の状況による社会的不適切さについて、教師が意図的に子どもたちに知らせる場面はそう多くないことが考えられるが、半数以上の幼児が3歳児クラスでも理解していることが明らかとなった。

一方、「仕方ない時もある」と答えた幼児の割合は、3歳児クラスでは3割を超え、4歳児クラスで約2割、5歳児クラスで約1割と減少傾向にあるが、いずれも1割程以上存在するという実態が確認できた。その理由には「面白いと思ったら仕方ない」や「楽しいことをしていたらいい」といった判断理由が挙げられていた。このことから、「ふざけ」や「からかい」といった笑いにつなげようとする言動と関連させて捉えていることも考えられた。時に、実際の子どもたちのやりとりの中では行為者が冗談によってコミュニケーションをとろうとする「からかい」を受け手が「嫌がらせ」と捉え、いざこざに発展するケースも見られる。「相手を傷つける言動」と「からかい」の線引きについて、幼児はどのような観点から判断しているのか検討することも今後の課題としていきたい。

まとめ

それぞれの例題を通して検討した道徳的規範への理解は例題ごとに異なる特徴が見られたが、学年ごとの共通点も見られた。

3歳児クラスでは質問への返答が難しい幼児も一定程度存在した。調査協力者の数が他の学年よりも少なくないことから、3歳児の結果は更なる検証が必要であるが、「他者を傷つける言動」に対し、6割くらいは「絶対にいけない」という理解を示していることが示唆された。4歳児クラスでは、善悪の状況依存性判断を示す幼児が増加し、「絶対にいけない」と答える幼児が7割以上に増加した。しかしその理由については「相手が泣く」「かわいそう」といった感情を推測する回答もみられたが、「遅いから」や「手がないから」といったその事実を理由にする回答や、「ダメ」「悪い」といった規範として扱われることだからといった回答が中心となった。以上から4歳児クラスの幼児も、善悪の判断基準が形成されつつあるが、その理由については自分の考えが確立されたものというよりは、保護者や保育者が過去に言っていたことや、規範として提示された経験のあることをもとに、まずは「良いか、悪いか」という視点で判断していることが考えられる。

5歳児クラスでは、相手の感情を推測するキーワードが増加すると共に、相手を傷つける言動をとった後に生じる相手と自分との関係性を推測した理由が見られた。

Q1のように能力に関する内容は、その逸脱に理解を示す幼児が4歳クラス以上で増加した。このような能力については、練習をするなど、自らの力によって変化していく可能性がある。そのことをこれまでの経験の中で知識として得ている為、許容を促したことも考えられる。また、勝つことへの意識の変化に伴って、「遅い」と言った相手の心情を共感することができたため、許容を促したことも考えられる。

一方、Q2、Q3のように自身の努力等で変化する可能性が低いことに対しては学年が上がると共に許容しなくなることが考えられた。

今後は、保育の中で相手を傷つける言動が見られた場合に、保育者のかかわり方はどのような方法が考えられるのかについて、以上の結果を基にした議論を展開していくことが課題である。

本研究の限界として、まず、3歳児クラスの調査対象者が他の学年よりも少なくなったこと、全体的にみると、前年度に同じ調査体験を有している幼児と有していない幼児が混在していることが挙げられる。(たとえば2X年の3歳児クラスの幼児は2Y年の4歳児クラス、2Z年の5歳児クラスと移行しているため、前年度に同じ調査体験を有している。)

また、調査の実施時期が2月の後半であることから、3歳児クラスの幼児も殆どの幼児が4歳児になっており、5歳児クラスは小学校就学の直前であることから、進級当初に調査を行った場合にはまた異なる結果となることが予想されるため、時期や調査対象を変えた調査を行うことが結果の精緻化のためにも課題となる。

注

- 1 幼児教育無償化に関する関係閣僚・与党実務者連絡会議（第2回）平成25年6月6日資料URL：www.cas.go.jp/jp/seisaku/youji/dai2/sankou1.pdfに記載されている「就学前教育・保育の実施状況」の調査結果を参照している。

引用文献

- 越中康治（2005）. 仮想場面における挑発、報復、制裁としての攻撃に対する幼児の道徳的判断 教育心理学研究、**53**, 479-490.
- 越中康治・新見直子・淡野将太・松田由希子・前田健一（2007）. 攻撃行動に対する幼児の善悪判断に及ぼす動機と目的の影響 広島大学大学院教育学研究科紀要、第三部教育人間科学関連領域、**56**, 319-323.
- 畠山美穂・畠山 寛（2012）. 関係性攻撃幼児の共感性と道徳的判断 社会的情報処理過程の発達研究、発達心理学研究、**23**, **1**, 1-11.
- 加用文男・岩淵尚美・林みずき・鈴木淳子・小田 昭（1981）. 幼児のルールあそびにおける違反・逸脱・インチキ 心理科学、**4**, **2**, 19-28.
- 森川敦子・鈴木由美子（2006）. 子どもの「社会的慣習」と「道徳」との概念区別における「状況依存性」の発達の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要、第一部 学習開発関連領域、**55**, 53-59.
- 森川敦子（2007）. 子どもの「社会的慣習」概念の発達に関する研究—「状況依存性」に着目して 広島大学大学院教育学研究科紀要、第一部学習開発関連領域、**56**, 49-58.
- 森川敦子（2008）. 規範意識を育成するための指導法に関する基礎的研究—子どもたちの“道徳”と“社会的慣習”の逸脱行為を許容する要因の検討— 道徳と教育、**52**, 142-153.
- 首藤敏元・二宮克美（2002）. 幼児の社会道徳的逸脱に対する教師の働きかけ方 埼玉大学紀要、教育学部教育科学、**51**, **2**, 17-23.
- 湯浅阿貴子（2013）. 幼児期における規範意識の形成に関する研究（2）—「暗黙の規範」に対する気付きの現状と保育者の指導— 日本道徳教育学会第82回大会論文集、pp.86-87.